

編集後記：2019年最初の「天気」は理事長の巻頭言から始まり、読み応えのある多くの解説記事や近年注目の深層学習を用いた研究論文など興味深い記事が沢山掲載されましたが、楽しんでいただけたでしょうか。この拙文は年の瀬迫る12月に書いていますが、ちょうど京都の清水寺で今年の漢字「災」が発表されたというニュースが入ってきました。大阪と北海道の地震、平成30年7月豪雨、非常に強い台風の上陸に加えて、2018年の流行語大賞トップテンに選ばれた「災害級の暑さ」は記憶に新しいと思います。これまでに流行語大賞に選ばれた気象用語には「PM2.5」、「爆弾低気圧」、「ゲリラ豪雨」などがあり、今でもマスコミによく取り上げられます。パスワードという言葉をご存じでしょうか。特にICT（情報通信技術）分野で耳にすることが多いようですが、もっともらしい説明がつけられた専門用語や印象づける技術用語のことだそうです。10年前にはユビキタスやクラウドコンピューティング、5年前にはビッグデータやデータサイエンス、2～3年前からはIoT（モノのインターネット）やAI（人工知能、機械学習や深層学習を含む）という耳慣れない言葉が飛び交うようになりました。ごく

最近だとIoAとかXRという用語も聞きますが私には説明できません。気象学会でも大会シンポジウムや専門分科会のタイトルにビッグデータやAIという用語が使われるようになりました。毎年出てくる新しい用語を知らない世の中について行けなくなる時代のようなようです。政府が策定する科学技術基本計画は研究者にとって重要ですが、サイバー空間とフィジカル空間が融合した超スマート社会（Society 5.0）と書かれても想像すらできず困惑する人も多いのではないのでしょうか。科学技術イノベーションの強化と書かれても、イノベーション（技術革新とか新機軸）ってそんなに次々生まれるものなのか言っている人は、研究現場から置いてきぼりを食いそうです。私自身は仕事なのか趣味なのか分かりませんが、諸般の事情によりVR（仮想現実）やAIといった新しいことにも手を出しています。新しい技術に触れることは楽しいのですが、流行に乗せられているだけかなと思うと複雑です。新しい用語や概念を学ぶのは時間もエネルギーも必要ですが、研究者としては面倒でも新しいことにも挑戦することが重要ではないのでしょうか。「そだねー」（佐藤晋介）